

エクリチュールと〈声〉

佐々木 充

近年文学において「声」について論じられることが多くなってきた。文章を読んでいてそこから〈声〉が聞こえてくるという経験は、私にとっては自明のことであり、特に散文においては最も重要かつ基本的なことだと考えているが、他人にとっては必ずしもそうではないらしい。私の文章の中に感ずる〈声〉と、彼らの言う「声」は異なっていることが多い。そこで、文章において私の経験している〈声〉がいかなるものであるのか、ここで明らかにしておきたい。

1

私が書かれた文章の中に〈声〉というものが存在するのをはじめて意識したのは、小林秀雄の文章を読んでいたときである。高校生のとき、国語の試験を受けていて、問題の文を何度も読んでゆくうちに、その文から小林秀雄の〈声〉が聞こえてきた。まだ読んだことのない文章であり、また小林の文章だと明示されてはいなかったが、はっきり小林の〈声〉だということがわかった。これが自分にとっては、ある決定的な瞬間であったといってよい。その時以来、文学の、特に散文による文学の意味が私にとっては、まったく別のものになった。このような〈声〉のあるなしが文学の基準になったのである。〈声〉が聞こえてくるということには、さまざまなことがそれに伴っている。たとえば、言葉が生きて感じられるという経験。それに伴う鋭い喜びと快樂。何よりも、その言葉を発する人間が、そこに現前しているという感覚。これは感覚的と言うしかないような経験である。しかしこのような経験を持たない者にこのことを説明するのは難しい。テキストを分析しても、〈声〉の本質は明らかにはならない。テキストを分析することと、聞こえてくる〈声〉という現象を認識することとは別のことであるからだ。〈声〉は文章の中にあり、文章は言葉からなる。しか

し、その言葉の音韻の特徴を分析してみたところで〈声〉の正体に達することはできない。〈声〉はただ聞くしかないものである。

〈声〉は耳を澄ましていなければ聞こえてこない。一人の人間の文章から〈声〉が聞き取れるようになるためには、少なくとも、同じ著者の本を四、五冊は読まないとだめだというのが経験の教えるところである。どうやら、相手の精神に自分の精神を同調させることができなければ、〈声〉は聞こえてこないものらしい。

このような、私自身の〈声〉の経験に対して、たとえば初期デリダは西洋形而上学における音声中心主義ということを使う。そこにおいては、語られた言葉、パロールとしてのロゴスこそ言語の本質であるとみなされ、形而上学においてはロゴス一般の有意義性を根拠として狭義の論理性（ロジック）の特権化が行われる。形而上学は音声中心主義であり、文字に対する声の優位は、絶対神の言葉としての声から、ルソー、カント的な良心の声、ハイデガーにおける存在の声、音声学・音韻論の特権性にいたるまで、西洋の思考の歴史を貫き、それはアルファベットという「表音文字」と結びつく。ロゴスの価値、声の価値は、「現前」の特権性と不可分であり、西洋の存在論は、存在者の存在は現前的存在、現に目の前にありありとあることであると考えた。現前の存在のモデルは、古代ギリシャではイデア、中世哲学では神、近代哲学ではコギト、意識、主観の自己現前。これらの真実在はすべてロゴスにおいてこそ純粋に心理として現前しうる。このようにして、ロゴス中心主義は、現前の形而上学であるということになる。¹このように、西洋形而上学をロゴス・音声中心主義と現前の形而上学であると指定した上で、ロゴスの中にすでに「原^{アルシ}エクリチュール」が存在していることを説くことによってそれを脱構築しようとするのである。

たとえば、デリダはフッサールのロゴス・音声中心主義について、次のように言う。フッサールは、言表的記号は指標的システムの中にとられ、それに汚染されているが、「内的独語」はそれには汚染されていないと考える。フッサールの捉えようとしているのは、表現の純粋性、意味作用の論理の純粋性であり、すなわちロゴスの可能性である。現実の対話の中では、意義（Bedeutung）のイ

¹ 高橋哲也『デリダ脱構築』講談社1998、77-79頁。

デア的側面が感覚的側面に結びつき、それによって汚染されている。したがって、伝達のない言語、独語的言表、《孤独な心的生》の絶対的に低い声の中でこそ、表現の純粹性を追求しなければならない。他者への伝達ないし告知が本質上指標的であるのは、他者の体験の現場が我々の根源的直観に対して拒まれているからである。それに対し、内面的独語においては語は単に表象されるに過ぎない。体験一般は現前的に存在するものの様態における体験であり、この体験の本質には、それ自身についての反省の可能性が属しており、そしてこの反省において、その体験は確実かつ現前的な存在者として必然的に位置づけられる。記号はこのような自己への現前には無縁である、と。²

このようなロゴス中心主義的な現前の形而上学というものがヨーロッパの伝統の中に存在することに対するデリダの脱構築とは別な形で、私自身の経験からは、〈声〉の形而下学とでも言うべきものがありうることを主張しなければならないだろう。そこにおいては、アルファベットによらない日本語の表記の中に主観の自己現前がなされ、完全には音標的でない(アルファベットももちろん完全には音標文字ではない)文字によって書かれた文章の中に〈声〉が現前するのである。ロゴスの中に「原^{アルシ}エクリチュール」が存在するというのではなく、エクリチュールの中に^{フォニー}ロゴスが、そして音声^{フォニー}が現前するのである。

2

書かれた文章から〈声〉が聞こえてくるということを最初に経験したのが小林秀雄の文章であったと言ったが、小林自身、〈声〉というものを強く意識していた人である。たとえば、その『本居宣長』の冒頭で、彼は次のように言う。

「宣長の述作から、私は宣長の思想の形態、或は構造を^ひ引き出そうとは思わない。実際に存在したのは、自分はこのように考えるという、宣長の肉声^ひだけである。出来るだけ、これに添って書こうと思うから、引用文も多くなると思う。」³

² Jacques Derrida, *La voix et le phénomène* (Paris: Presses Universitaires de France, 1967), pp.17-66 (高橋允昭訳『声と現象』理想社 2003年 35-113頁) 参照。

³ 『小林秀雄全作品27 本居宣長 上』新潮社 平成16年 40頁。

ここで小林の所謂「宣長の肉声」というのは、小林が宣長の文章の中に聞いた〈声〉であって、本当の意味での宣長の音声としての肉声でないということは自明のことである。私が小林の文章の中に聞いた〈声〉は、小林が宣長の「肉声」と言うものと同じである。このような声は「肉声」といいたくなるほど、一種の感覚的な経験であるからだ。そして、宣長自身、次のように言っている。

「此物語を読むは、紫式部にあひて、まのあたり、かの人の思へる心ばへを語るを、くはしく聞々にひとし。」（「玉のをぐし」二の巻）

宣長が聞いた紫式部の「声」も、肉声ではない。紫式部が書き記した『源氏物語』の文章から聞こえてくる〈声〉であった。つまりエクリチュールの中に現前する〈声〉であった。ここで宣長は、小林が宣長の「肉声」をその文章の中から聞いたように、また私が小林の〈声〉をその文章から聞いたがごとく、紫式部の〈声〉を聞いているのである。われわれに聞えているのは、文章の中に宿る〈声〉であり、本当の音声としての肉声ではない。

したがって、以下の本居宣長についての小林と江藤の対談の中で語られている「肉声」とは、紛らわしいが、別のものである。

「江藤 漢才を排して言葉の純粹状態を見きわめようとしたとき、宣長は発音されている言葉、肉声、それこそが言葉だという簡明な事実を、確信を持ったと考えてはいけませんか、そういう受け取り方は間違いでしょうか。」

小林 それでいいんです。あの人の言語学は言霊学なんですね。言霊は、まず何をおいても肉声に宿る。肉声だけで足りた時期というものが何万年あったか、その間に言語文化というものは完成されていった。……これにはっきり気付いてみれば、何千年の文字の文化など、人々が思い上がっているほど大したものではない。そういうわけなんです。」⁴

一見、「文字の文化」を軽視しているような言い方であるが、しかし、小林自身はその「大したものではない」「文字の文化」に生命を託してきた人である。それは文字通りそうなのであって、彼の文章には生命が宿っている。文章に〈声〉

⁴ 『「本居宣長」をめぐって』『小林秀雄全集 第十四巻 本居宣長』（第5次）新潮社 平成14年539頁。

があるとはそういうことなのである。

3

〈声〉がどのようにして生成するのかについて、小林の文章にそれを跡付けるような資料があるので、それを見てみたい。小林の講演嫌いは有名であるが、それでも、国民文化研究会主催の大学生のための夏季九州合宿に前後五回も出かけて講演している。昭和四十九年夏の講演は「信ずることと知ること」と題されて、テープとして売り出されている。そして、この時の講演に小林自身の朱が入って会報誌への発表を許可したものがある。また、それは後になって、「信ずることと知ること」という文章として正式に発表された。この三者を比べてみることによって、小林の文章の中にかなる形で〈声〉が生成してゆくのか、その様を見ることができる。

小林秀雄は講演をする場合、かなり練習をしてから実地に臨むと言われている。この場合にもそれが当てはまるかどうか分からないが、まず、この講演の冒頭部分を、テープから忠実に文字に起こしたものを、すこし長くなるけれども、見てみることにしよう。

「僕は何をその、喋ろうかと思って、んー、いたら、あの一、この間、あの一、んー、ユリ・ゲラーっていう、青年が、あの、念力の実験というのをやりまして、大騒ぎになったことがありますね。あれ僕、んー、面白かったんですよ。それでね、そんなことから話そうと思って。実は、あの、あたしの友達に、今日出海っていう男がいて、えー、そのおとつあんでのがね、もう今はなくなったけども、えー、日本のいちばん、ま、古い船長さんだね、日本郵船の。そいで、船ばっかり乗ってたんだけども、それがあの、船長やめてからね、心霊学ってものに凝っちゃった。そいで、クルシナムルテっていう有名な、あの、んー、神秘家がありますよ、インドにね。これももうずっと昔、その人の会員になりましたね。それは非常に有名な人だったけれども、だから、ぼくはああいいうことは昔から知ってんです。学生のころからね。そいで今度、その、ユリ・ゲラーってのがいろんな念力っていうものをいろんなことやるってんでね、そいで、テレビ見てたんですよ。僕はそんなもの面白かったからね。そいで、僕

はゴルフをやってんです。で、毎週、今君なんかと行くんですがね、ある時、んー、今君と、あと二人、漫画家のね、あの、那須良輔ってのと、それからもう一人の男と、四人でゴルフに行ったんですよ。そしたらねー、何も僕は、その、テレビにあるなんてこと知らなかった。そしたら茶店のおばあさんがね、今の顔を見てね、あのー、わたしとこ時計が動きましたって、こういうんだよ。何のことやら、僕分からない。そしたらそれは今も知らなかったんだけどね、あの、今の兄貴の今東光ってのがあるね、あの今東光って男がね、そのユリ・ゲラーの、時計を動かす実験に立会人で出てたんだよ。だからそのおばあさんがだね、テレビを見て自分で、時計、壊れた時計もって動けーって念じていたんだね。そしたら動いた。そんな時に、今東光がそばにいたから、今東光の弟ってことよく知ってますからね。今の顔を見たら、あのー、今は知らないけれども、私の時計動きましたよって、こう、声かけたんだよ。それからいろいろ話し聞いたの。そしたらね、あのー、んー、いろんな人が動いた、動いたって言うんだね。そいで、面白くなってね、今君のうちに、その次にテレビが出る時にね、みんなで集まったんだよ。面白いからみんな、やってみようじゃないか。

そしたら、あのね、その日は、僕と今君とやっぱり、おんなしメンバーだったな、4人でね。そしたら今度は、その、あのー、時計が動くだけじゃなくて、んー、スプーンを曲げるなんてこともやるんだって言うんだね。それでテレビで六時半にそのユリ・ゲラーってのはカナダかなんかにいるんだよ。そいで六時半になるとね、私は念力をかけるから、諸君、壊れた時計を念じてくれ。六時半に私は念じるから、諸君もその、私と一緒に念じてくれ、と。時計よ動け。そいからあの、んー、スプーンよ曲がれ、念じてくれと。で、ちょうど六時半になったんだよ。で、今君とこ、おいおい、おれんとこに、どっか壊れた時計があるだろう。で、奥さんが探してきたら、二つあったんだよ。どうせ、もう、だいぶ壊れてほったらかしてあった時計。あたしそれ一つ持ってたの。そいから、那須君も一つ持ってたの。そいから、今君のね、あのー、一番下の娘さんがね、もう結婚して子供もあるんですけどね、これがその、んー、スプーンを持ってた。そいで（笑）、六時半になったからね、「動けー」って言ったんだよ。そしたら、僕の時計、動いたんだよ（場内笑い声）。そいから那須君の時

計も動いちゃったんだよ。そいからね、その、んー、今さんのその、末の娘さんね、娘さんが、「きゃー」って言ったらね、あの、曲っちゃったんだよ（場内爆笑）。あの一、あれが、スプーンが、そいでね（笑）、そしたらね、あの一、あたしは面白いなーっと思っていたの。そしたら、しばらくたったら、この、スプーンはいんちきでね、あの、ここんどこで曲げちゃうんだ、手品だってこと出たでしょ。わたしはその、手品でもなんでもない、妹さんのがぎゅっと曲がったの見てましたからね、こりゃ、手品でもなんでもないんだよ。曲がったんだよ。そしたらね（笑）、確かなんだよ。つまらないことだよ、そんなことは。

私はそういうことは、昔、もう知ってるしね。それは私のちょうど高等学校のころだな。ずいぶんああいうものがはりました。そいで、今さんのおとつあんなんかもうよく知っててね、ああいう念力ってもんはね、すぐだめになっちゃうんですよ。あのユリ・ゲラーなんか、ありゃあ、あんな商売してりゃあ、もうすぐだめになるんだよ、ああいうのは。あの、にぶっちゃうんだね。で、子供にはそういう念力あるんだけど、やっぱりそんなに、あの一、いつまでもできるもんじゃないんですよ。そういうことはもう分かっていることなんです、昔から分かっていることなんだよ。で、そんなスプーンが曲がるとか何とか、そういうものにまあ、手品だとか、やれ子供をああいうことをして儲けようとかね、いろんな人が出てまあ、大騒ぎになっ、なって、そいで注意してね、そのころのその新聞やら雑誌やら見てたんだよ、世間ではこういうものをどういう風に、この、言うのかとね。と、実にもう浅薄なんだね。ほんとに浅薄ですよ。あの、批評がね。エー、僕はそんなスプーンが曲がるとか、やれ、念力がどうの、んー、箱の中のものが当たるとか、手品とかね、そんなものを、んー、よりもだね、驚くべきことはまあ、いっぱいあるんで、そういう、この、ことにたいする今の知識人の、インテリゲンチヤの態度だね、実にだめですね。ああいうものを一体どういう風に受け取ったらいいのかと。僕ら、君一、教養のある、君らだってそうだろう、知識人がだね、ああいう不思議なこと、つまり、念力ってものをだ、念力岩をも通すって言うだろう。念力岩をも通すって言う意味はね、何でも自分で一生懸命やったらば、成功するって言う、そういう譬えですよ。だけど、念力ってものは岩をほんとに通すかも知れんじゃないか。

そういうことどういう風に考えてんの、諸君は。そういう風な態度だね、ああいう不思議ってものに対する態度、そういう態度が突にあいまいでね、嘲笑的態度をとるか、それとも、面白いんだっていう、面白いがる、なんか、スポーツでも見るような態度をとるか、どっちかでしょう。で、まじめに考えないんですね、ああいうこと。それが僕は気に食わないんですよ。一人ぐらいはだな、ああいう不思議なことがあった場合に、いまの知識人てものはどういう態度でああいう不思議なもの、念力っていうようなものにたい、たい、態度をとっ、取るのが、正しいかっということを考えるやつはないんだねー。まあ、ほんとにそういうことじゃあ墮落してます。いま、みんなおしゃべりばかりいるけれども、ちょっとした、そういう風なことにたいするね、あの一、正しい態度ってものがないんだね。

で、僕は昔、そういうことがはやったころ、あたしゃあ、大学にまだ入らなかった。大学に入ってたかな、んー、入ったときぐらい、その時に、そのね、ベルグソンのね、あの、そういう念力に関する本を読んだことがあるんですよ。それで、ああ、なるほどっと思ったことがあります。それ、僕は今度、なんか諸君、なんかお話しようかなと思っていたらね、そんなこと、僕、ちょっと考えたもんでね、この間、また僕読み返してみたの。その本はね1913年に出た本ですよ。13年に行った、ベルグソンの講演です。まあ、諸君、あんまり、よ、読んでおられないだろうと思うからね、念力に対してベルグソンはどういう態度を取ったかということをお話しますよ。これは、もうずいぶん前の、1913年の講演ですから、そんなところを、ロンドンにね心霊学協会ってもんがあったんです。で、念力っていうもんについて学者たちが寄っていろいろ考えた。その時にベルグソンがその心霊学協会に呼ばれたんです。呼ばれてロンドンで講演したんです。で、その講演の筆記なんですがね。それ読み返してみると、もう、ちっとも今日でも、その、彼の意見は変わらないね、変わらないでだいじょぶな意見だね。やっぱりああいう人はえらい人です。そいだもんで、それをまあね、あの一、大体のところをお話ししましょう。

それはねえ、あの、こういう話なんだ。えー、この前の戦争のときです、時にね、えー、夫が、どこだったか、まあ、遠い戦場でね、死ぬんです。戦死するんです。するとその、奥さんがね、夫人が、あの、パリにいて、あの、ちょ

うど、その、死んだときに、夫が塹壕で倒れたところを見るんです、まぼろしに、夢の、夢に見るんです。それで、夫が死んだことを知るんです。ああ、いま死んだ、と。それで、後でよく調べてみると、そのちょうどその時刻に夫は、その夫人が見たとおりの格好で、そばに数人の同僚の兵士がいたんです。で、すぐ介抱したんだけど、死んじゃったんだけど、その数人の兵士にも後で会うんです。すると、同じ光景で、同じ顔の光景をだね、あの一、その夫人は見たんです。そういう話をね、あの一、ベルグソンはある大きな会議がありましてね、その会議に、何の会議だか、知らないが出席してたときに、話がそういう精神感応だな、テレパシーだよ、その話になったときに、え一、あるフランスのね、名のある学者が、立派な学者が、これ医者なんですからけれども、その人にそういう話をしたんだね、ある人が。するとね、その医者はこう答えたって言うんです。確かにね、あの一、私はその話を信ずる、と。それで、その、話した夫人は立派な人格の持ち主で、嘘なんか決して言わない人だし、で、あの一、信じます、と。だけど困ったことがひとつある、と。というのは、あの、昔から夫でも、自分の身内でも、子供でも、死んだ場合に、し、死んだ知らせというものは、実に数限りなく多いんだ、と。諸君だってそんなことあるでしょ。私もあります。そういう経験を持っています。そういう経験は非常に多いんです。だから、それはみんな嘘じゃないだろう。だけど、困ったことはだね、その、間違った経験も、たっ、非常に多いって言うことです。たとえば、私は自分のかみさんが死んだ夢を見るでしょう。だけど、かみさん、生きているわね。じゃ、しょうがないじゃない。だけど、子供の死んだ夢を見る、やっば、子供はぴんぴんしてる。そういう風に無数のまた、正しくない幻があるでしょう。じゃ、どうして、その、ねえ、正しくない幻のほうを、ほっといて、たしかにあたしが、子供が死んだってという夢を見たら、たしかに子供がそのときに死んだっていう正しい幻の方だけを気をつけるのか、と。それが困るんです、と。わたしはその夫人の話を信じたい、と。人格も信じたい、と。嘘をついてないということを知りたい、と、おそらくそうだろう。けども、そういうたくさんのもうひとつの間違いがあるじゃないか、と。人間はいろんな夢を見ます。だけど、みんなその夢は正しくないんです、間違いなんです。現実には照らし合わせてみればね。どうしてその間違いのほうはほっとくんです。たまたま偶然にあたっ

たほうだけをどうして、諸君は取り上げなければならないか、と、こう答えたんだそうです。その医者ね。それで、ベルグソンはそれを聞いてたんです、横で。そしたらそこにもう一人若い女の人が出てね、その医者に、「先生、先生のおっしゃることは私にはどうしても間違っていると思います。先生のおっしゃることは、非常に論理的に正しいけども、何か私は先生は間違っていると思います。」と、こう言ったっていうんです。そんな時にベルグソンが、あの、やっぱりそばで聞いてましてね、あたしは、その娘さんのほうが正しいと思ったっていうんです。」⁵

次は、この講演を文字に起こしたものに、小林自身が朱を入れたものを見てみたい。朱を入れたというより、自分のしゃべったことを材料にして、ほとんど新たに書き改めたものと言ってよい。小林が原稿を書く時、最初に書いたときの原稿はその次の日には十分の一に削られていると言われていたが、前のテープを文字に起こしたものと、次の文章を比べてみればその一端を知ることができよう。

「この間から、ユリ・ゲラーという青年が念力の実験というのをやまして、大騒ぎになったことがありますね。私の友達の今日出海君のお父さんというのが、今は亡くなりましたが、日本郵船の、日本で一番古い船長さんでした。その人が船長をやめてから、心霊学というものに凝って、インドの有名な神秘家、クルシナムルテという人の会の会員になりました。だから僕はああいうことは学生の頃からよく知っていました。ただ念力というような超自然的現象についての話が、世間を騒がすという事は、時々ある。私は、そういう現象は常にあるが、これが世間の大きな話題となるという事には、いろいろな条件が必要だ、ただそう考えています。ああいう不思議がいつもある、いつも私達の生活には随伴している事を疑いません。ところが、これを扱う新聞や雑誌を注意して見ていると、その批評は実に浅薄なのです。世間には、不思議はいくらもあるのですが、現代のインテリは、不思議を不思議とする素直な心を失っています。テレビで不思議を見せられると、これに対し嘲笑的態度をとるか、スポー

⁵ 新潮カセット文庫『小林秀雄講演 信ずることと考えること』I A面 新潮社 昭和60年段落筆者。

ツでも見るような面白がる態度をとるか、どちらかでしょう。今の知識人の中で、一人くらいは、念力というようなものに対してどういう態度をとるのが正しいかを考える人がいてもいいでしょう。ところがいない。彼等にとって、理解出来ない声は、みんな不正常的なのです。知識人は本当に墮落しています。皆おしゃべりばかりしていますが、そういうことに対する正しい態度がないのですね。

僕が丁度大学に入った時分、ベルグソンの念力に関する文章を読んだことがあります。諸君に何かお話ししようと思って、この間また読み返してみました。その文章は1913年に、ベルグソンがロンドンの心霊学協会に呼ばれて行った講演の筆記なのです(註・白水社刊・ベルグソン全集第五巻『精神エネルギー』)中の「生きている人の幻と心霊研究」一渡辺秀訳)。その大体のところをお話ししましょう。

ベルグソンがある大きな会議に出席していた時、たまたま話が精神感応、テレパシーに及んだ。ある婦人が、フランスの名ある学者——この人は医者ですが——に向ってこういう話をした。この前の戦争の時、夫が遠い戦場で戦死するのです。パリにいたその夫人は、丁度その時刻に夫が塹壕で斃れたところを夢に見たのです。それを取りまいている数人の兵士の顔まで見たのです。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫はその夫人が見た通りの恰好で、側を数人の同僚の兵士にとりかこまれて、死んだのです。これは、夫人が頭の中に勝手に描き出したものと考えすることは、不可能です。どんな沢山な人の顔を描いた経験を持つ画家も、見た事もないたった一人の人の顔を想像裡に描き出す事は出来ない。見知らぬ兵士の顔を夢で見た夫人は、この画家と同じ状況です。夢に見たとは、たしかに念力という知れない力によって、直接に見たに違いない。そう仮定してみることは、何の不合理もないのです。ところがその話を聞いて、医者はこう答えたというのです。私はその話を信ずる。夫人は立派な人格の持主で、嘘など決して言わない人だと信じます。しかし、困ったことが一つある。昔から身内の者が死んだ時、死んだ知らせを受取ったという人は数限りなく多い。けれども、その死の知らせが間違っていたという経験も非常に多い。無数の正しくない幻があるでしょう。どうして正しくない幻の方をほっといて、正しい幻の方だけに気をつけるのか。たまたま偶然に当たっただけを

どうして取上げなければならないか、とこう答えたというのです。ベルグソンは横でそれを聞いていたのです。そうすると、そこにもう一人若い女の人がいて、ベルグソンに、「あの先生のおっしゃることは私にはどうしても間違っていると思われます。先生のおっしゃることは、論理的には全く正しいけれど、何か先生は間違っていると思います」と言ったというのです。ベルグソンは、私はその娘さんの方が正しいと思ったと言うのです。』⁶

講演そのものから、余計なものがそぎ落とされてゆく過程がよく分かる。しかし、ほとんど小林秀雄の文章になっているようでいて、まだ、完全には小林の〈声〉が明確に聞こえてこない文章である。それが、次の一般に公表された文章になると、完全な小林秀雄の〈声〉が立ち現れている文章になっている。「この間テレビで、ユリ・ゲラーという人が念力の実験というのをやりまして、大騒ぎになったことがありましたね。私の友達の今日出海君のお父さんというのが、もうとうに亡くなったが、心霊学の研究者であった。インドの有名な神秘家、クルシナムルテという人の会の会員でした。だから私はああいうことは学生の頃からよく知っていました。念力というような超自然的現象を頭から否定する考えは、私にはありませんでした。今度のユリ・ゲラーの実験にしても、これを扱う新聞や雑誌を見ていますと、不思議を不思議と受けとる素直な心が、何と少いかに驚く。テレビで不思議を見せられると、これに対し嘲笑的態度をとるか、スポーツでも見て面白がるのと同じ態度をとるか、どちらかでしょう。念力というようなものに対してどういう態度をとるのがいいかという問題を考える人は、恐らく極めて少いのではないかと思う。今日の知識人達にとって、己れの頭脳によって理解出来ない声は、みんな調子が外れているのです。その点で、彼等は根柢的な反省を欠いている、と言っていいでしょう。

その時分、私が丁度大学に入った頃、ベルグソンの念力に関する文章を読んで大変面白く思った事があります。その文章は、1913年にベルグソンがロンドンの心霊学協会に呼ばれて行なった講演の筆記なのです（「生きている人のまぼろしと心霊研究」）。その大体のところを覚えていますので、お話ししようと思

⁶ 「信ずることと知ること」『新潮』（第八十巻第五号）四月臨時増刊号昭和58年4月5日発行 38-40頁。

います。ベルグソンがある大きな会議に出席していた時、たまたま話が精神感応の問題に及んだ。あるフランスの名高い医者も出席していたのだが、ある婦人がこの医者に向かってこういう話をした、この前の戦争の時、夫が遠い戦場で戦死した時、パリにいたその夫人は、丁度その時刻に夫が塹壕で斃れたところを夢に見たのです。それをとりまいている数人の兵士の顔まで見たのです。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫は夫人が見た通りの恰好で、周りを数人の同僚の兵士に取りこまれて、死んだ。これに関するベルグソンの根本の考えは実に簡明なのです。この光景を夫人が頭の中に勝手に描き出したものと考えerことは大変むずかしい。と言うよりそれは、不可能な仮説だ。どんな沢山の人の顔を描いた経験を持つ画家も、見た事もないたった一人の人の顔を想像裡に描き出す事は出来ない。見知らぬ兵士の顔を夢で見た夫人は、この画家と同じ状況にあったでしょう。夢に見たとは、たしかに念力という未だははっきりとは知られない力によって、直接見たに違いない。そう仮定してみる方が、よほど自然だし、理にかなっている、と言うのです。

ところがその話を聞いて、医者はこう答えたというのです。私はその話を信ずる。夫人は立派な人格の持主で、嘘など決して言わない人だと信じます。しかし、困ったことが一つある。昔から身内の者が死んだ時、死んだ知らせを受取ったという人は非常に多い。けれども、その死の知らせが間違っていたという経験をした人も非常に多い。つまり沢山の正しくない幻もあるわけです。どうして正しくない幻の方をほっといて、正しい幻の方だけに気を取られるのか。たまたま偶然に当たった方だけを、どうして取り上げなければならないか、とこう答えたというのです。ベルグソンは横でそれを聞いていたのです。そうすると、そこにもう一人若い女の人がいて、その医者に、「先生、先生のおっしゃることは私にはどうしても間違っていると思われまます。先生のおっしゃることは、論理的には非常に正しいけれど、何か先生は間違っていると思います」と言ったというのです。ベルグソンは、私はその娘さんの方が正しいと思ったと書いています。』⁷

⁷ 小林秀雄「信ずることと知ること」『考えるヒント3』文春文庫 1976年 7-9頁。

4

文字に書かれた文章の中に、〈声〉はこのようにして生成する。しかし、この〈声〉はただ単に〈声〉を聞くような気がするというわけではない。この〈声〉は独特の魅力を持っている。先に、〈声〉が聞こえてくると同時に、言葉が生命を持つように感じられるといったが、その言葉を発する人間の個性とじかに触れているような感じ、読むものの精神の中にその人間がよみがえってくるような感じがする。人間を理解するというはその人間ということが分かるということであると同時に、その人間の個としてのあり方がまざまざと感じ取られるということだろう。自分の個性は文字による文章でしか表すことができないという人間が現れたとき、真の著述する人間が生まれる。小林秀雄の「私の人生観」という文章には、そのことが明確に表明されている。

「私が講演というものを好まぬ理由は、非常に簡単でして、それは、講演というものの価値をあまり信用出来ぬからです。自分の本当に言いたいことは、講演という形式ではあらわすことが出来ない、と考えているからです。(中略)私は、書くのが職業だから、この職業に、自分の喜びも悲しみも託して、この職業に深入りしております。深入りしてみると、仕事の中に、自ら一種職業の秘密とでも言うべきものが現れて来るのを感じて来る。あらゆる専門家の特権であります。秘密と申しても、無論これは公開したくないという意味の秘密ではない、公開が不可能なのだ。人にはまったく通じ様もない或ものなのだ。それどころか、自分にもはっきりしたものではないかも知れぬ。ともかく、私は、自分の職業の命ずる特殊な具体的技術の中に、そのなかだけに、私の考え方、私の感じ方、要するに私の生きる流儀を感得している。かような意識が職業に対する愛着であります。

天職という言葉がある。若し天という言葉をも、自分の職業に対していよいよ深まって行く意識的な愛着の極限概念と解するなら、これは正しい立派な言葉であります。(中略)

私は書きたい主題はたくさん持っているが、進んで喋りたい事など何もない。喋って済ませる事は、喋って済みますが、喋ることではどうしても現れて来ない思想というものがあって、これが文章という言葉の特殊な組み合わせを要求す

るからであります。若し私に人生観というものがあるとすれば、そちらのほうに現れざるを得ない。」⁸

具体的な、文字に書き記してゆくと言う身体的なありようを離れて、「思想の形態或は構造」などという抽象的なものはない。小林の「喋ることではどうしても現れてこない思想」あるいはヴィジョンは「文章という言葉の特殊な組み合わせ」の中だけに現れてくるものなのであり、それを離れて一般化、普遍化できるような思想ではないのである。文章によって表現される思想内容ではなく、文章のなかで動いてゆく精神の働きそれ自体が思想となると言うのであろう。そのような精神の運動のありようが「文章という言葉の特殊な組み合わせ」の中に実現され、それを読むわれわれの精神の中でよみがえるとき、それが〈声〉として聞こえてくるというような事態が生じているのであろう。

したがって、〈声〉と小林の言う「思想」あるいはヴィジョンは一致する。小林の言葉が〈声〉を獲得するのを感じる時に、小林のヴィジョンが読者にも明確になってくる。後は小林の〈声〉に従ってゆきさえすれば、小林のヴィジョンの世界が自然に目の前に立ち現れてくる。思想の普遍性などというものがこのとき疑われてくる。彼の個性的な〈声〉を離れて思想はないし、小林のヴィジョンを自分のヴィジョンとすることなどは所詮不可能な話であることが明白なこととして現れてくるからだ。彼のヴィジョンをともなった〈声〉は感染力が強く、それを模倣したい誘惑にかられるのであるが、それをまねることで彼のヴィジョンが得られるわけでもない。そのヴィジョンに参入しようとするれば、その〈声〉にひたすら耳を傾ける以外にはないのだということもまた自明のことである。このことについて、小林自身は本居宣長の文体を語るという形で、『玉勝間』七の巻「おのれとり分けて人につたふべきふしなきこと」について次のように言っている。

「まことに平明な文である。(中略)

だが、これを平明な文と受け取るだけでは済むまい。これは七十歳の頃書かれた、いかにも宣長らしい平明な文体でもあるのだ。文体は平明でも、平明な文体が、平明な理解と釣り合っているわけではない。文体というものは、はっ

⁸ 「私の人生観」『考えるヒント3』文春文庫 1976年 164-165頁。

きり割り切れた考え方では捕らえられぬ、不透明な奥行きを持つ。』⁹
 その「不透明な奥行き」というもののなかにこそ、宣長の思想やヴィジョンが生きているのであり、それについて語ることこそが、小林が『本居宣長』で行ったことだったのである。ここからも分かるように、〈声〉は文体と同義である。〈声〉とは無論比喩であり、本当に肉声が聞こえてくるわけではないからだ。それが一種感覚的なものとして感じられることは確かなことで、小林自身も文章の中に立ち現れてくるこの個性的なものを「肉声」といつてみたり、また次の文章の中に見られるように触覚的な比喩を用いて語ることもある。

「僕は、理窟を述べるのではなく、経験話すのだが、さうして手探りをしてゐる内に、作者にめぐり會ふのであつて、誰かの紹介などによつて相手を知るのではない。かうして、小暗い處で、顔は定かにわからぬが、手はしつかりと握つたといふ具合な解り方をしてしつと、その作家の傑作とか失敗作とかいふ様な区別も、別段大した意味を持たなくなる、と言ふより、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるといふ様になる。

これが、「文は人なり」といふ言葉の真意だ。それは、文は眼の前にあり、人は奥の方にある、といふ意味だ。』¹⁰

さらには嗅覚の比喩を用いて語られることもある。小林は福沢諭吉の文章について次のように述べている。

「『學問のすすめ』や『文明論之概略』が、あれほど讀まれたのは、ただ、世人の爲に運らされた平易な解説だつたが爲とは考へられまい。やはり、世人は福澤といふ獨特な人間を、そこに嗅いだのである。

福澤全集の緒言に、彼の自作の率直な解説を讀む者は、西洋文物の一般的解説が、いかに個人的な實際経験に触発されて書かれたかを見て驚くであらう。彼の文は、到るところで、現はすまいとした自己を現はしてゐる。「福翁自傳」が、日本人が書いた自傳中の傑作であるのは、強い己れを持ちながら、己れを現はさんとする虚榮が、まるでないところから來てゐると思ふ。世人は、福澤の俗

⁹ 『小林秀雄全作品27 本居宣長 上』128-129頁。

¹⁰ 「讀書について」『小林秀雄全集 第六卷 ドストエフスキイの生活』新潮社 平成13年78頁。

文に、福澤の魅力ある己れを嗅いでみた。嗅ぐといふ経験は確實だつたが、嗅ぐといふ言葉は曖昧だつた。それは今日とても変わりはあるまい。だが、曖昧な言葉しかなければ、その経験自体まで曖昧なものとなしたがる、さういふ病氣は、今日の知識人の方が重くなつたであらう。」¹¹

文章に立ち現れてくる個性、文体が発する独特のアウラとでもいうべきものを、ここでは嗅覚の比喩をもって語っているのである。小林が言うようにこの「嗅ぐといふ経験」はそれを経験した、あるいはその経験を自覚したことのあるものにとっては「確実」な自明な経験である。声を聞くといい、手をつかむといい、嗅ぐといい、その一種独特な感覚的とでもいうしかないような言葉に言い表しがたい経験を表現するための比喩に過ぎない。言葉はいまいであるが、経験は確実なのである。

5

周知のように、プラトンの哲学を論ずるものにとってのつまずきの石として、プラトンのエクリチュール否定の問題がある。プラトンはその第七書簡および『パイドロス』において、哲学の第一義を語るものとしての文字で書かれたものや書物を否定した。たとえば『第七書簡』においては、次のように語られている。

「それゆえ、およそ真面目なひとならだれしも、かりにも真面目に探求さるべき真実在について、書物を著わし、これを世間に投じてその猜疑と困惑に曝すなどということをするおそれはない。とすれば、以上からして、要するにもし何びとかの手になる書物を、それは立法家の法令形式で書かれたものであれ、そのほかの文体で書かれたものであれ、ともかくどんなものにせよ書物を目にしたばあいには、いつも、こうと知らねばならない。つまり、書かれてある事柄は、筆者にとって、いやしくもかれ自身が真摯であるからには、なにも特に真剣な関心事ではなかつたのであり、特に真剣な関心事は、むしろ、かれの内面の最も美しい領域に、どこにもとなく置かれてある。また、もしも事柄が、か

¹¹『小林秀雄全集 第十二巻 考へるヒント』新潮社 平成13年 335頁。

れによってまさしく真剣に扱われ、文字に託されたのであったとしたなら、「されば、みよ、その折りこそは」神々ならぬ現身のかれが、「手ずからその分別心を、失くさせたもの」(344C-344D)¹²

「真面目に探求さるべき真実在」すなわち哲学の第一義は、「かれの内面の最も美しい領域に、どこにもなく置かれてある」のであって、文字に託すということは不可能なことであり、もし、まじめにそういうことがなされているとしたら、その人間は分別を失ってしまっているというのである。また、「知」が「教育」されるということがあるとするならば、それはかろうじて哲学的問答法(ディアレクティケー)によってなのであり、本に書かれたものを読むことによってなのではないと言われている。

「とはいえ、すべてをつぶさにたどる問答の進め方なら、ひとつの問題から他の問題へと、一段一段、行きつ戻りつ進められているうちには、優れた素質のあるひと〔教える者〕の持つ「知」を、同じく優れた素質のあるひと〔学ぶ者〕の精神の中に、生みつけることが、かろうじてながらも、ある。(中略)そして、先に挙げられた「示し言葉」や「定義」や「視覚」や「感覚」などのそれぞれが、相互に突き合わされ、好意に満ちた偏見のない吟味にかけられ、反駁される。また、対話者双方が腹藏のない問答を交す。そうするうちにやっとのことで箇々の問題について思慮と知性的認識が、人間にゆるされるかぎりの力をみなぎらせて、輝き出す。」(343E-344C)

哲学の第一義を教授するということは、「優れた素質のあるひと」同士の間での問答法つまりディアレクティケーによって徹底的に検討されてはじめて人間の中に「思慮と知性的認識」が「輝き出す」のであり、書物を読むというような生半可な行為によってできるようなことではないというのである。

「どんなものにせよ書物を目にしたばあい」というからには、プラトン自らの著書自体もその中に含まれることになる。事実、第七書簡には次のように書かれている。

¹² 水野有庸 長坂広一訳『プラトン全集 14 エピノミス(法律後篇)書簡集』岩波書店 1975年 147頁。以後、プラトンからの和訳引用文については、注記のないかぎり原則として『プラトン全集』岩波書店 1974-1978年による。

「しかし、たしかにこれだけのことは——わたしが心を砕いている事柄に関して、わたしからでもほかのひとたちからでも教わって、あるいは自分自身が発見したつもりで、知識を持っていると称しているかぎりの、すでに書物を書いたか、これから書こうとしているひとたちのすべてを指して——言明できます。すなわち、これらのひとたちは、少なくともわたしの判断では、肝心の事柄を、少しも理解している者ではありえない、と。実際少なくともわたしの著書というものは、それらの事柄に関しては、存在しないし、またいつになってもけっして生じることはないでしょう。」(341C)

「それらの事柄」とは、哲学における第一義を指す。プラトンの書簡には常に偽作の疑いが付きまどっているが、その中では第七書簡が最も信憑性の高いものと考えられているものではあるが、それでも完全に真作であると同意がなされているわけではない。したがって、このエクリチュール否定の言葉も本当にプラトンの真意であるのか疑わしいともいえるのであるが、同様のエクリチュール否定がプラトンの真作であることが間違いないとされる『パイドロス』においてもなされているのである。

「ソクラテス リュシアスでもほかの誰でもいいが、一個人としてもものを書く場合にせよ、あるいは、法律の制定者として政治的な文章を書くというやり方で、公の立場でもものを書くにせよ、いやしくもかつてものを書いたり、ないしはこれから書こうとするに際して、もし書かれた文字の中に何か高度の確実性と明瞭性が存すると考えてそうするのであれば、その場合にこそ、人が実際に非難を口にするとしないとにかかわらず、書く本人にとって恥ずべきことなのである。なぜならば、正と不正について、善と悪について、覚めて見るその真実のすがたと夢の中の影像との区別を知らないということは、たとひ群衆がこぞってこれをほめ讃えようとも、真理の名において非難されることをけっしてまぬかれるわけには行かないのであるから。

パイドロス そのとおりですとも。

ソクラテス これに対して、書かれた言葉の中には、その主題が何であるにせよ、かならずや多分に慰みの要素が含まれていて、韻文にせよ、散文にせよ、たいした真剣な熱意に値するものとして話が書かれたということは、いついかなるときにもけっしてないし、さらには、口で話す言葉とて、吟誦される話

のように、吟味も説明もなく、ただ説得を目的に語られる場合には同断である
と考える人、書かれた言葉のなかで最もすぐれたものでさえ、実際のところは、
ものを知っている人々に想起の便をはかるという役目を果ただけのものである
と考える人、——そして他方、正しきもの、美しきもの、善きものについての
教えの言葉、学びのために語られる言葉、魂の中にほんとうの意味で書きこま
れる言葉、ただそういう言葉の中にのみ、明瞭で、完全で、真剣な熱意に値す
るものがある人、——そしてそのような言葉が、まず第一に、自分自
身の中に見出され内在する場合、つぎに、何かその子供とも兄弟ともいえる
ような言葉が、その血筋にそむかぬ仕方ではかの人々の魂の中に生まれた場合、
こういう言葉をこそ、いわば自分の生み出した正嫡の子とも呼ぶべきであると
考えて、それ以外の言葉にかかずらうのを止める人、——このような人こそは、
おそらく、パイドロスよ、ほくも君も、ともにそうなりたいと祈るであろうよ
うな人なのだ。」(277D-278B)

このエクリチュール一般を否定するプラトンの言葉についてどのように考える
べきかについては、これまでさまざまな論議がなされてきた¹³。田中美知太郎
は、『パイドロス』がプラトン五十代の作品であり、『第七書簡』は七十代半ば
に書かれたものであること、また、プラトンは四十歳ごろにアカデメイアを創

¹³ Ronna Burger (*Plato's Phaedrus: A Defense of a Philosophic Art of Writing* (Birmingham: University of Alabama Press, 1980), p.91) や Charles L Griswold, Jr. (*Self-Knowledge in Plato's Phaedrus* (Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1996), pp.219-226) は、プラトンの書物否定はプラトン自身の対話篇には当てはまらないとする。また、プラトンには、話されるだけで書かれなかった教えがあるとし、ありうる限り残存する文献からそれを再構築しようとする者 (Hans-Joachim Kraemer, *Arete bei Platon und Aristoteles* (Heidelberg: Winter Universitaetsverlag, 1959). Konrad Gaiser, *Platons Ungeschriebene Lehre* (Stuttgart: E.Klett, 1963), J. N. Findley, *Plato: The Written and Unwritten Doctrines* (London: Routledge and Kegan Paul, 1974), Geobanni Reale, *Towards a New Interpretation of Plato* (Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 1996)) がいるが、しかし、後世に残った文献も、心覚えのためにとっておかれ、文字化されたものであるなら、プラトン自身が否定したものであることになろう。これに対し、Harold Cherniss (*Aristotle's Criticism of Plato and the Early Academy* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1944), *The Riddle of the Early Academy* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1945)) は、プラトンの哲学は書かれた書物の中にしかない、と考える。W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, Vol. 4, (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), pp.56-66 および Graeme Nicholson, *Plato's Phaedrus: The Philosophy of Love* (Indiana: Purdue University Press, 1999), pp.75-88参照。

設し教育に本格的に携わり始めたことを考えると、アカデメイア創設以前は書かれた言葉と話す言葉の分裂を経験することはなく、そのような分裂意識なしに書かれてきたが、アカデメイアにおける教育体験によって書かれた言葉よりも話す言葉のほうがはるかに教育のために有効であることを経験し、このような言葉の二元性を感じずにいたったのだ、と考えている¹⁴。その間の事情を、田中は次のように書いている。

「ソクラテスとプラトンは別人であるけれども、しかし若いプラトンはソクラテスによって一つの回心、あるいは精神的革命の如きものを経験し、全心全霊をソクラテスに傾倒したのであるから、そこには一種の一心同体の如きものがあつたとしなければならないだろう。(中略)しかしながら、プラトンの哲学思想の発展と文学的可能性の展開は、ソクラテスを主人公としている点において、いつまでも一つでありつづけることはできなくなった。哲学的なものもまたそれ自身の道を歩き出して、もはやこれまでの文学的な枠組のなかにはおさまらないところが出て来たからである。あたかもその頃プラトンはシケリア旅行から帰り、アカデメイアに学園を創設することになったのである。そしてそこで教育と研究との活動が、新しくかれの哲学思想の発展に結びつき、そこに別の途を用意することになった。つまり哲学と文学との幸福な結婚時代は終り、学園の仕事が中間に入りこんで来たのである。プラトンの哲学的活動は、学園と著作の二方向に分裂し、『パイドロス』に見られるように、むしろ学園の仕事の比重が増し、著作は二次的なものと考えられるようになったのではないか。プラトンは著作が自分の哲学の全部をカバーできるものではないことを感じなければならなかったのである。かれはその一部だけをやや気軽に、いたずらごとの遊びと名づけて、著作にゆだねることにしたのである。学園の研究討論の過程で出て来たものを、著作のうちに展開してみるのには、このような遊びの態度がかえって自分自身にとっても説得的だったのかも知れない。」¹⁵

田中の考えでは、若いプラトンがソクラテスに出会っていわば改心させられ、

¹⁴ 田中美知太郎『プラトン I 生涯と著作』岩波書店 1979年 462-465頁、また、田中美知太郎『人間であること』文藝春秋 1984年 195-196頁参照。

¹⁵ 田中美知太郎『プラトン I 生涯と著作』462-464頁。

ソクラテスとの精神的一体感を経験し、それを基にミーメシス（物まね）文学によってソクラテスを表わそうとしたが、アカデメイアを創設して以後の後期のプラトンは、その哲学の発展により著作というものの限界を感じ、著作を一種の遊びとして否定したということである。これによれば、否定された著作は後期のものということになろう。すると、プラトンが全身全霊を打ち込んでなされた前期から中期にかけてのソクラテス対話篇は、『パイロドス』や『第七書簡』の中で否定していないということになる。プラトンのエクリチュール否定から、ソクラテス対話篇をそのようにして救ったということになるのだろうか、しかし『パイロドス』におけるソクラテスの「書かれた言葉の中には、その主題が何であるにせよ、かならずや多分に慰みの要素が含まれていて、韻文にせよ、散文にせよ、たいした真剣な熱意に値するものとして話が書かれたということは、いついかなるときにもけっしてない」という言葉や、『第七書簡』の「わたしの著書というものは、それらの事柄に関しては、存在しないし、またいつになってもけっして生じることはない」というプラトンの強い語気をとまなう断言の言葉からは、自らの著作さえもすべて否定しているように感じられる。ところで忘れられがちなことなのであるが、エクリチュール否定のこのプラトンの言葉自体、書かれた言葉によっている。とすると、このエクリチュール否定の考えを文字に託したとき、プラトンは自分の真意が本当に伝わることを確信していたのであろうか。なにか遊びがそこに入っていたのであろうか。これまでプラトンによって書かれたエクリチュール否定の言葉によって、多くの人間が惑わされ、混乱に陥ってきたことを考えると、やはりここにもプラトンが文字に考えを託すときの遊びの精神が発揮されているようである。そうだとすれば、エクリチュール否定の問題に正面から答えることは難しいだろう。それならば、別の角度から考えてみよう。それは、プラトンの著作におけるソクラテスの〈声〉の問題である。

6

現在、プラトンのエクリチュールにおける〈声〉の問題を論じようとする時、たとえば『パイロドス』におけるソクラテスの〈声〉を論じて、次のような語

られ方がなされる。

Socrates is still very much the philosopher here, and he continues to practice his accustomed art of questioning, the art of dialectic, but he is able to speak in other tones and accents as well, able to mix *the voice of myth and the voice of rhetoric with the voice of dialectic*. Plato has taken him out of his accustomed urban milieu and put him into a scene of great natural beauty along the river Ilissos, where a multitude of statues stand in honor of different gods and where demigods and river nymphs are said to sport. Inspired by the beauty and the divinity of this scene, Socrates is led into discussions about mythology, and in his own great speech he launches into a vast mythological discourse about the soul. He is bringing his dialectic into the closest connection with myths. (イタリック筆者)¹⁶

「神話の声」「レトリックの声」「ディアレクティケーの声」のポリフォニー (polyphony of myth, rhetoric, and dialectic)¹⁷が『パイドロス』において見られるというわけであるが、ここでの「声」は、著者自らが言い換えているように 'tones' とか 'accents' あるいはもっと明確に 'forms of discourse and communication'¹⁸、と言ったほうが適切であろう。神話やレトリックやディアレクティケーがそれに特有な肉声としての「声」を持っているわけではない。そこで述べられているのが、神話的な語り、レトリックを用いた文章、哲学的問答であるというにすぎない。このようなディスコースやコミュニケーションの形態を称して「声」というのは単なる比喩にすぎない。つまり、そこで声とでも言うしかないような現象が生じているわけではないからである。それに対し、プラトンのソクラテス対話篇を読むとき、そこから聞こえてくる〈声〉というものが存在する。すなわち、ソクラテスの〈声〉である。テキストにおいて生じるものであるから、無論、実在のソクラテスの肉声とは異なる〈声〉であり、これも一種の比喩と言え言えるが、ほとんど肉声と聞きまがうほどありありとわれわれの精神に現前する〈声〉である。プラトンのエクリチュールに明確

¹⁶ Graeme Nicholson, *Plato's Phaedrus*, pp. 13-14.

¹⁷ *Ibid.*, p.14.

¹⁸ *Ibid.*, p.75.

に現前する〈声〉、ソクラテスという精神が持つにいたった個性的な〈声〉である。エクリチュールがこのように個性的な〈声〉を持つという事態はモンテーニュをはじめ、近代になってからは珍しい現象ではなくなる。それはある作家個人の個性的文体と呼ばれるものである。しかし、プラトンの時代にあって、〈声〉がエクリチュールの中から聞こえてくるということはきわめてまれなことであり、エクリチュールの歴史にあって前代未聞のことであったとって差し支えなからう。エクリチュールにおいてある人物が〈声〉を獲得するにいたったことは、これが始めてのことなのではないか。プラトンのほかにもソクラテスを登場させるエクリチュールは存在し、ソクラテス文学とも言うべきものが当時発生していたのだが¹⁹、プラトンの対話篇におけるように、ソクラテスがその独特の〈声〉を獲得するにはいたっていない。プラトンの対話篇において初めて、ソクラテスという特異な精神がエクリチュールの中に〈声〉として現前することになったのである。われわれはまずこのことを明確に認識しておく必要がある。

ソクラテスの〈声〉とは、ソクラテスという人間の精神の独特な運動が言葉と一体化して表れたとき、われわれが感ずるその独特な趣とでもいうべきものだろう。プラトンの文章の中には、人々のソクラテス体験を描く言葉が散見するが、そこにはわれわれがソクラテスの〈声〉と呼ぶものを彼ら自身がどう受け止めたかが描かれている。それはソクラテスと接触した人間が、その圧倒的な彼の精神の運動であり同時にロゴスの運動でもあるものの中に巻き込まれてゆく自らの驚くべき経験を、その驚きの側から描いたものである。その中でもっとも有名なものは、アルキピアデスによってなされるソクラテス賛美の言葉であろう。

「いいか、この人にとっては、誰かが美しいかどうかなどぜんぜん問題にならず、誰一人思ってもみないであろうほどにそんなことは軽蔑しているのだ。このことは、また誰かが金持かとか、あるいはそうした世間からもてはやされる名誉なものをほかに何か持っているかとか、そういうことについても同様である。そして、それらの持ち物をすべて何の価値もないものと思い、さらにわれわれ

¹⁹ 田中美知太郎『人間であること』文藝春秋 203-204頁。

をも無に等しいつまらぬものと考えているのだ。——こうぼくはあえて君らに言う。——そして、一生を通じ人々に対して空とほけ^{ふざけ}巫山戯通して (eirōneuomenos de kai paizôn) いるのだ。しかしこの人が真面目になり、そしてその扉が開かれるとき、その内部の神像を誰か見たものがあるかどうか、ぼくは知らない。だがぼくは、すでに以前見たことがあるのだ。そしてそれらの像が非常に神々しく、金色燦然として、世にも美しく、讚歎すべきものに見えたので、これを要するに、ソクラテスの命じることは何でもしなければならぬ、というふうに思われたほどだ。」(216D- E)

「この空とほけ^{ふざけ}巫山戯通して (eirōneuomenos de kai paizôn) いる」というのが、所謂「ソクラテス的アイロニー」である。これは、ソクラテスの言葉がそれを聞いている人々に与える印象であり、われわれがプラトンのソクラテス対話篇を読むときそこから聞こえてくるソクラテスの〈声〉が与える印象でもある。しかし、一見皮肉と見えるこの言葉はソクラテスの精神のあり方と深く結びついたものであり、ソクラテス自身にとっては「空とほけ」とか皮肉とかいうようなものではない。このように聞こえる言葉の陰には驚くべき精神の率直さとロゴスに対する深い信頼が隠されている。『国家』においてソクラテスとポレマルコスが正義について問答しているのを、そばにいて聞いて腹を立てたトラシユマコスに対してソクラテスが、

「トラシユマコス、どうかそんなに怒らないでくれたまえ。もしぼくと、このポレマルコスが、いろいろの言説をしらべているうちに何か過ちをおかしたとすれば、それは心ならずもおかした過ちなのだということを、よくわかってもらいたい。だってそうではないかね——かりにぼくたちが金を探しているとしたら、わざとお互いに譲り合いながら探したりして、金を見つける機会を失ってしまうなどとは、まさか考えられないだろう それなのにいま、たくさんの金よりもさらに大切な〈正義〉を探し求めているというのに、お互いに譲り合っただけで、その発見にできるだけ力を尽くそうとしないなんて、そんな愚かなまねをぼくたちがしているなどとは、どうか思わないでくれたまえ。いやいや、これでほんとうに一所懸命なのだよ、君。ただ思うに、ぼくたちには力が足りないのだ。だから、君のように能力のある人たちとしては、ぼくたちを怒るよりは憐れむほうが、ずっとふさわしい態度ではあるまいか」

と言うとトラシュマコスは、「とげとげしい高笑いをして」ソクラテスの「空とぼけ」^{エイローネイア}をなじる。

「そらそら、お出でなすった！　これが例のおなじみの、ソクラテスの空とぼけというやつさ。そう来ることは百も承知で、わたしはここにいる人たちに、ちゃんと予言しておいたのだ。あなたはきっと答えるのをいやがるだろう、誰かに質問されると空とぼけて、何だかんだと言いつくろっては答えるのを避けるだろう、とね」(336E-337A)

このようにソクラテスのエイローネイアと呼ばれる語調は、アテナイ市民には「おなじみの」ものとトラシュマコスによって言われているが、たとえば、『ソクラテスの弁明』の最初の部分にすでに聞き取ることのできるものである。

「アテナイ人諸君、諸君が、わたしを告訴した人たちの今の話から、どういう印象を受けられたか、それは知らない。しかしわたしは、自分でも、この人たちの話を聞いていて、もう少しで自分を忘れるところでした。そんなにかれらの言うことは、説得力(もっともらしさ)をもっていたのです。しかし本当のことは、ほとんど何も言わなかったと行ってよいでしょう。」(17A)

このエイローネイアが頂点に達するのは、告発者がソクラテスの死刑を要求したのに対して、自分自身の方からも罰を申し出るという場面で、その科料として「国立迎賓館(プリユタネイオン)における饗応」を要求するという大胆不敵な提案をする場面であろう。

「さて、ところで、この男はわたしに対して、死刑を求刑している。よろしい。それなら、これに対してわたしはいかなる刑を申し出るべきでしょうか。アテナイ人諸君。むろん、至当のでしょう。では、それは何でしょうか。わたしはどのような了見によるにもせよ、その生活はじっと静かにしているようなものではなかったからというので、何の刑を受け、何を支払ったら、至当だということになるのでしょうか。わたしはしかし、大多数の人たちとは異なり、金を儲けるとか、家業をみるとか、あるいは軍隊の指揮や民衆への呼びかけに活動するとか、その他にも、国家の要職につくとか、また徒党を組んで、騒動を起すとかいう、いまの国家社会に行なわれていることには、関心をもたなかったのですが、それはそういうことには行って、身を全うするには、自分は本当のところ、まともすぎると考えたからなのです。それで、そこへはいっ

て行っても、あなたがたのためにも、わたし自身のためにも、なんの利益もあるはずのないようなところへは、わたしは行かないで、最大の親切とわたしが自負するところのものを、そこへ行って、各人に個人的につくすことになるような、そういうところへ赴いたのです。つまりあなたがたの一人一人をつかまえて、自分自身に気をつけて、できるだけすぐれた善い者となり、思慮ある者となるようにつとめ、自分にとってはただ付属物となるだけのものを、決して自分自身に優先して気づかうようなことをしてはならないし、また国家社会のことも、それに付属するだけのものを、そのもの自体よりも先にすることなく、その他のことも、これと同じ仕方、気づかうようにと、説得することを試みていたのです。すると、このようなことをしてきたわたしは、何を受けるのが至当でしょうか。何かよいことをでなければなりません。アテナイ人諸君、もしも本当に、至当の申し出をなすべきだとすればです。しかもそれは、何にもせよわたしに適當するような、そうした善いものでなければなりません。それなら、何が適當するのでしょうか。わたしという男は諸君のために善をはたらきながら、貧乏をしています。そして諸君に激励を与えるのに時間の余裕を必要としているのです。およそ、アテナイ人諸君、この者がこのような事情にあるとすれば、国立の迎賓館において給食を受けるより、適當なことはないのです。それはオリュンピアの競技で、諸君の誰かが、一頭もしくは二頭、四頭の馬で勝利を得た場合に、そうするよりも、ずっと適切です。なぜなら、その人は諸君に、ただ幸福と思われる外観をあたえるだけだけれども、わたしは諸君をほんとうに幸福であるようにしようとつとめているのだから。しかも、馬を出場させるような人は、何も給食を必要としないけれども、わたしは必要とするのです。だから、わたしが当然の権利にもとづいて、至当の申し出をすべきであるならば、これがわたしの申し出る料料です。すなわち国立迎賓館における食事。」(36B-36E)

この言葉からもわかるように、ソクラテスのエイローネイアは皮肉やアイロニーではない。ソクラテスはきわめて率直かつ真面目にロゴスの命じるところに従っているのである。ソクラテスのエイローネイアとは、この率直な精神がロゴスの導くところに従って発言した時、現実の側がその言葉の真意を測りかねて、あるいは馬鹿にされてように感じ、あるいは腹を立て、そのようなソク

ラテスの態度に名づけた言葉なのである。現実の側に立つ人間がソクラテスの奇妙なロゴスの振る舞いに同調できず、その動きのいわば手触りとでも言うものを表現した言葉と言っていいであろう。

7

ジャック・デリダは、そのプラトン論「プラトンのパルマケイアー」において、『パイドロス』の中でソクラテスによって語られるタウトによる文字の発明についての神話に言及し、エクリチュールと「声」の問題を扱っている²⁰。その神話とは次のようなものである。

エジプトのナウクラテス地方に発明の神テウトが住んでいた。当時エジプト全体に君臨していた最高神はタムスで、ギリシャ人は太陽神アンモンと呼んでいた神だった。テウトはあるときタムスのところへ赴き、自分の発明したいろいろの技術を披露し、エジプト人に広く伝えることをタムスに説いた。話が文字のことに及んだとき、テウトはこう言った。

「王様、この文字というものを学べば、エジプト人たちの知恵はたかまり、もの覚えはよくなるでしょう。私の発見したのは、記憶と知恵の秘訣なのですから。——しかし、タムスは答えて言った。「たぐいなき技術の主テウトよ、技術上の事柄を生み出す力をもった人と、生み出された技術がそれを使う人々にどのような害をあたえ、どのような益をもたらすかを判別する力をもった人とは、別の者なのだ。いまもあなたは、文字の生みの親として、愛情にほだされ、文字が実際にもっている効能と正反対のことを言われた。なぜなら、人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。また他方、あ

²⁰ Jacques Derrida, *La dissémination* (Paris: Édition du Seuil, 1972), pp.69-197.

なたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくても物知りになるため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合いにくい人間となるだろう。」(274E-275B)

デリダは、西洋形而上学の起源に位置すると考えられていたプラトンのエクリチュールの神話の中に、ロゴス中心主義、音声中心主義、現前の形而上学という、階層化された二項対立を形成しようとする形而上学の欲望を見出す。この神話の中で、神々の王であるタムスはエクリチュールを臣下から、すなわち下からあるいは外から受け取る。ロゴスをつかさどるものがタムスだとすれば、エクリチュールは階層的にはその下に位置するものであり、ロゴスの外側に位置するものである。また、王であるタムス神自身は自己自身に対して現前しており、そのロゴスもまたそのパロールの中にすでに現前していて、書く必要はない。すなわち文字は必要とされていないのである。このようにして、この神話の中でパロールはエクリチュールに対立し、エクリチュールの優位に立つ。パロールは真正で正嫡のロゴスとして、特権化される。エクリチュールは派生的、非本来的なもの、パロールの頹落状態として貶められる。デリダは、プラトンのテキストの中に含まれている両義的な *pharmakon* (良薬/毒薬) およびその関連語 (*pharmakeus pharmakos pharmakeia*) を用いて、この神話のロゴス中心主義、音声中心主義、現前の形而上学の脱構築を試みる。すなわち、この神話の中で否定される「記憶と知恵の秘訣」であるエクリチュールは、真のロゴスとは「それを学ぶ人の魂の中に知識とともに書きこまれる言葉」(276A)「魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉」(278A) (アンダーライン筆者)であるとソクラテスが言うときのメタファーに現れるように、ロゴスの中にすでに「原^{アレシ}エクリチュール」として存在しているのである。この神話が目指すロゴス中心主義、音声中心主義をこの神話のテキスト自体が裏切っているということになる。²¹

²¹ 高橋哲也『デリダ 脱構築』50-113頁を参考にした。

このようにデリダは、ロゴスの中にすでにエクリチュールが存在しているということによって、形而上学の祖と目されるプラトンの脱構築を試みる。しかしこのような形でプラトンの神話を脱構築したとしても、プラトンは、自ら否定したはずのエクリチュールをなぜ大量に残したのかという問題が消え去ったわけではない。話は逆ではないだろうか。プラトンのテキストにおいては、声の中にエクリチュールがすでに常に存在するというより、エクリチュールの中に〈声〉が、ロゴスが現前するのである。²²

『第二書簡』は偽作の疑いの強いものであるが、その最後の部分でプラトンは自分が書物という形で哲学の第一義について書いたことはない、次のように言っている。

「それゆえわたしは、これまで決してそれらの問題については書物を著わさなかったし、プラトンの著作なるものも何ひとつ存在しないわけだし、また将来も存在しないでしょう。そして今日プラトンの作と呼ばれているものは、理想化され若返らされた (kalou kai neou gegonotos) ソクラテスのものに、ほかなりません。」(314C)

ここでは、『第七書簡』や『パイロス』とは少し異なり、自身の哲学の重要問題について書いた書物はないというと同時に、そのような書物はプラトンではなくソクラテスが書いたものであると言う。「理想化(美化)され若返らされた(kalou kai neou gegonotos) ソクラテス」とは、ホメロスにおける詩女神ムーサ

²² ここでエクリチュールにおける〈声の現前〉の過程について述べておく。書くときに人は声に出しつつ、あるいは内言しつつ書く。内言には二種の内言がある。外言を模倣する形での内言と、外言を要しないような内言がある。つまり口の動きの模倣をすでに超えている内言がある。口の動きにいたる直前の内言であり、直後の内言でもある。(また内言にはそれに対する観察が伴う。) プラトンはソクラテスの外言を聞き、その言葉の持つ独特の運動の記憶を脳裏にとどめ、対話篇を書くときにそれを模倣しようとしていたであろう。しかし、プラトンの精神においてそれはすでにある時のソクラテスの記憶というという個別具体的なものは異なったものとなっていた。すなわち、『第二書簡』の「理想化(美化)され若返らされたソクラテス」であり、このプラトンの精神の中で〈生きている〉ソクラテスの〈声〉は第二の内言としてプラトンのエクリチュールに固定化される。読者におけるレクチュールにも外言および第一、第二内言の区別はある。レクチュールにおける外言とその模倣としての第一の内言と、それを超える第二の内言がある。その運動の中でエクリチュールに固定化された〈声〉はまたその運動と生を取り戻す。作者の第二の内言としてエクリチュールに固定化されていたソクラテスの〈声〉は、読者の第二の内言とそれへの観察によって読者の精神の中に現前化される。観察が伴わない場合、それは単なる意味としてしか現れない。

のごときものを想定しているのかもしれない。ホメロスはその詩の冒頭に、ムーサに呼びかけ「アキレスの怒りを歌え」と言い、また、「諸方を流転した男のことを話してくれ」と言う。ホメロスの詩は、ホメロス個人の著作と言うよりも、ムーサが語る詩なのである。ソクラテスはプラトンにとってこのムーサのような存在だったのかもしれない。それはともかく、若き日のプラトンにとってロゴスが現前したとき、それはソクラテスの肉体を取って現れたものだった。ソクラテス以外に、ロゴスがこのような形で顕現したことはなかったのである。ソクラテスの問答法は、それを他人が模倣してみたところで、そこに真正なロゴスなど現れようがなかったに違いない。真正なロゴスは、ソクラテスの死とともに消えてしまったのである。しかしまた、そのロゴスはプラトンの「魂の中に書き込まれて」もいた。あるいは彼の精神の中に「植えつけられ」、また「灯火のように」点ぜられていた。そのロゴスは依然としてソクラテスの〈声〉を持っていたであろう。それこそ「理想化（美化）され若返らされたソクラテス」に他ならない。エクリチュールを否定し真実のロゴスとはいかにあるべきかを説くときのプラトンの言葉には、若き日にソクラテスと自らが対話を交わし、哲学に目覚めて行ったときの記憶が常に付きまとっているように見える。たとえば次の言葉は、プラトンがソクラテスに出会って哲学を志すにいたったその過程を描いていると考えることができよう。

「さて、そのようなひとたちには、そもそもの課題が全体として何であるのか、またどのようなものであるのか、その過程にどれだけの問題があり、どれだけの労苦を伴うものなのかを、とうぜん、指摘してやらねばなりません。というのは、それを聞いたひとは、もしそのひとが実際に愛知者であるとともに、この課題に性格の向きも適い、資格も充分である——とは、つまり神に近い稟性をそなえていることにほかなりませんが——という、そういうようなばあいには、そのひとはかならず、驚くべき学びの道を教わったと思い、いまこそ張り切らねばならない、そうしなければ生きる甲斐もないと、思うものです。で、それからあとは、かれは、自分でも心を引きしめ、この道の先導者にも心を引きしめてもらい、どの段階においても目的を達するか、もしくは指導者なしに自分で自分を指導できる力を、手に入れるかするまでは、気をゆるめない。そういう方向に、そういう心がけで、こういうひとは生きてゆく。つまり、どん

な仕事についているにせよ、一面ではその仕事に従事しながらも、他面では、何はさておきつねに哲学に、また、自分自身を最大限に聡明な、記憶力のある、胸中冷静にものごとを考量できる者に育ててくれるといった、そういう類の一日一日の心の糧に、執心しつづけるといふふうにして。そして、この方向に反対な生き方は、一貫して憎むものです。」(『第七書簡』340B-D)

このようにして育って行く真正なロゴスの体験は魂から魂へと飛び移る「火」のようなものなのである。それは、ある状態に止まるのではなく常に運動してやまないものである。個人から個人へと移動し、また、個人の心の中であって「養い育て」られるものである。

「実際少なくともわたしの著書というものは、それらの事柄に関しては、存在しないし、またいつになってもけって生じることはないでしょう。そもそもそれは、ほかの学問のように、言葉で語りえないものであって、むしろ、[教える者と学ぶ者とが]生活を共にしながら、その問題の事柄を直接に取り上げて、数多く話し合いを重ねてゆくうちに、そこから、突如として、いわば飛び火によって点ぜられた燈火のように、[学ぶ者の]魂のうちに生じ、以後は、生じたそれ自身がそれ自体を養い育ててゆくという、そういう性質のものなのです。」(『第七書簡』341C-341D)

『パイドロス』において、エクリチュールが否定され、真実の言葉が語られるときは、それを担うものとしての「哲学的問答法」(ディアレクティケー)とともに、植物の成長という運動の比喩によって語られる。

「ぼくは思う、そういった正義その他に関する事柄が、真剣な熱意のもとにあつかわれるとしたら、もっともっと美しいことであろうと。それはほかでもない、ひとがふさわしい魂を相手に得て、哲学的問答法の技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて植えつけるときのことだ。その言葉というのは、自分自身のみならず、これを植えつけた人をもたすけるだけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新なる言葉が新なる心の中に生まれ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そして、このような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の力にたよってかちうるのである。」(276D-277A)

このように動いてやまないロゴスの運動は、固定した文字の中に閉じ込めておくことのできないものであったろう。ある精神の中であって絶え間なく成長し、問答の中で他の精神に飛び火してまたそこで育ってゆくロゴスのさまを忠実に伝えるためにはどうすればよいのか。しかも、このロゴスはソクラテスという名前を持っていたのである。

8

オングは「声の文化と文字の文化」ということを言っているが、ソクラテスやプラトンの時代は、声の文化から文字の文化に移行しようとする時代であった。無論、句読点やパラグラフ、語間のスペースがないなど現在の活字本のような読みやすい形になってはいなかったが、書物というものは存在していたし²³、『ソクラテスの弁明』にも、アナクサゴラスの本は市場で安く売られているといわれているが(26E)、この時代は、黙読よりも音読が主として行われていただろう。本は、召使など、人に読んでもらって聞くものであり、自分で読む場合は、人に読んでもらったものをもう一度目で確かめるため、記憶を確かめ暗誦するために読まれたものだった²⁴。しかしこのような黙読がいまだ読書の主たる位置を占めているとは言いがたい状況の中で、プラトンはギリシャ哲学史のみならず、著述という歴史の中でも例を見ない功績を残したのである。その意義はなによりもソクラテスという哲学的精神をエクリチュールにおいて創造的に再現したことであり、しかもソクラテスの精神をエクリチュールに現前する〈声〉という形で身体化したことにある。これは、当時のいまだ貧弱な状況にあったエクリチュールの歴史の中では空前の大業とっていいものであった。イエス、仏陀、孔子という世界の四賢人と呼ばれる他の三人も、ソクラテスに勝るとも劣らぬ独特の精神の持ち主であり、その言行は弟子たちによって残されたが、プラトンのエクリチュールにおけるソクラテスのように、正確に細密にその精神の運動が〈声〉を伴って動くさまが描かれたものはいな

²³ W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, Vol. 4, p.59.

²⁴ 田中美知太郎『プラトン 1 生涯と著作』49-50頁参照。

い。プラトンは何のためにこのようなソクラテスを描く必要があったのか。哲学の第一義が著述によってなされないとするならば、プラトンがやったことは一体何だったのか。

プラトンが述べているように、哲学の「知」は対話によって、あるひとつの魂から別の魂へと、「飛び火によって点ぜられた燈火のように」燃え移ってゆくほかないものである。プラトンの対話篇を読むものはソクラテスの対話の場にいわば直接参加し、ソクラテスの精神の〈声〉を聞く。プラトンは、自分がソクラテスとの対話において経験したことを、エクリチュールの中で読者が体験することを可能にしたのである。その中核にあるのはソクラテスの〈声〉の現前であった。この〈声〉とは精神の声であり、無論肉声ではない。しかし、身体化したエクリチュールは肉声と聞き紛うような〈声〉を読むものに伝えてくる。われわれはソクラテスの〈声〉をじかに聞き、その〈声〉に耳を澄ます。プラトンがソクラテスによって経験したことを時空を超えて再体験する可能性が生まれたのである。このような形でプラトンはエクリチュールに〈声〉を現前させることに成功し、身体化するエクリチュールの最初の第一歩を踏み出したのである。ソクラテスの精神の生き生きとした〈声〉がそこに現前する。このプラトンのエクリチュールからソクラテスの精神が〈声〉を伴って立ち現れること、これこそ、いまだ誰も成し遂げたことのない空前の出来事だったのである。

現前するロゴスはエクリチュールという固定したテキストの中にその生き生きとした運動のさまをとどめてゆく。文字として固定化されたエクリチュールが、レクチュールの運動のなかでその生を取り戻す。ソクラテスのロゴスの動きがわれわれのレクチュール行為の中でその活動を取り戻すのである。楽譜を読めるものには音符の連続が音楽になって聞こえるように、正しいレクチュールができるものにはソクラテスの〈声〉が聞こえてくる。それは無論、ソクラテスの肉声ではない。「美しく新たになったソクラテス」の〈声〉、ソクラテスの精神の、活動してやまないロゴスの〈声〉である。この〈声〉はロゴスの動きのさまを伝える。すなわち、哲学の、愛知の運動するさまを描きはするが、知の何たるかを伝えるものではない。たしかにプラトンは哲学の第一義を描きはしなかったのである。知を愛する精神のしなやかな動きを精密に正確に描き

出ただけである。そこから肉声としか思われぬような〈声〉が聞こえてくるほどに。

参考文献

- 『小林秀雄全集 第六巻 ドストエフスキイの生活』新潮社 平成13年。
 『小林秀雄全集 第十二巻 考へるヒント』新潮社 平成13年。
 『小林秀雄全集 第十四巻 本居宣長』新潮社 平成14年。
 『小林秀雄全作品27 本居宣長』新潮社 平成16年。
 小林秀雄『考へるヒント3』文春文庫 1976年。
 「信ずることと知ること」『新潮』（第八十巻第五号）四月臨時増刊号昭和58年4月5日発行。
 新潮カセット文庫『小林秀雄講演 信ずることと考へること』I A面 新潮社 昭和60年。
- Platonis Opera*. Edited by John Burnet. 5 vols. Oxford: Oxford Classical Texts, 1901.
 『プラトン全集』岩波書店 1974-1978年。
 Plato's *Phaedrus*. Translated by Reginald Hackforth, with introduction and commentary
 Cambridge: Cambridge University Press, 1952.
 藤沢令夫『プラトン『パイドロス』註解』岩波書店 1984年。
 Plato's *Phaedrus*. Translated by Stephen Scully, with notes, glossary, appendices,
 Interpretative Essay and Introduction. Newburyport MA: Focus Publishing, 2003.
Euthyphro, Apology Crito, Phaedo, Phaedrus. Translated by Harold Fowler. Cambridge,
 Mass.: Loeb Classical Library, 1995.
 de Vries, G. J. A., *Commentary on the Phaedrus of Plato*. Amsterdam: Hackert, 1969.
- Burger, Ronna. *Plato's Phaedrus: A Defence of a Philosophic Art of Writing*. Birmingham:
 University of Alabama Press, 1980.
- Derrida, Jacques. *La dissémination*. Paris: Édition du Seuil, 1972.
 _____. *De la grammatologie*. Paris: Les Édition de Minuit, 1967. (足立和浩訳『根源の
 かなたに グラマトロジーについて』上下 現代思潮社 1998年, 1990年)
 _____. *La voix et le phénomène*. Paris: Presses Universitaires de France, 1967. (高橋 允

昭訳『声と現象』理想社 2003年)

Griswold, Charles, Jr. *Self-Knowledge in Plato's Phaedrus*. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1986.

Guthrie, W. K. C. *A History of Greek Philosophy*. Vol.3. Cambridge: Cambridge University Press, 1969. Vol. 4 (1975).

Nicholson, Graeme, *Plato's Phaedrus: The Philosophy of Love*. Indiana: Purdue University Press, 1999.

Ong, Walter J., *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London: Routledge, 1988.

Reale, Geobanni, *Towards a New Interpretation of Plato*. Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 1996.

Wilamowitz-Moellendorff, Ulrich von. *Platon*. 2 vols. Berlin: Weidemann, 1959.

高橋哲也『テリダ 脱構築』講談社 1998年。

田中美知太郎『ソクラテス』岩波書店 1957年。

田中美知太郎『プラトン I - IV』岩波書店 1979 - 1984年。

田中美知太郎『人間であること』文藝春秋 1984年。